

国 語 科

ことばを通して学ぶ意欲を高める国語科の研究

—読み物教材における「対比」の効果—

西 木 英 里

1 はじめに

今年度の国語科の教科テーマを「ことばのおもしろさを感じ、学ぶ楽しさをつくりだす国語科の学習」と設定している。

国語科は、ことばについてことばをとおして学ぶ教科である。子どもたちは、文字や語彙を習得することによって、新たな事柄やことばのより深い意味を理解するとともに、表現力を豊かにし、認識を広げることができるようになる。本学校園では、昨年度実施した学習全般についての実態調査から、関心・意欲を高めることが課題であることがわかった。同様に国語科の学習についての実態調査からも、国語科の学習は大切で将来役に立つと感じてはいるが、必ずしも学習に意欲的に取り組めていないという実態が明らかになった。

本研究では、ことばのおもしろさとは、単にことば遊び的なおもしろさだけではなく、一つひとつのことばに込められた意味の奥深さや洗練された表現の豊かさであるにとらえる。そして、学ぶ楽しさとはことばを吟味する活動を通してことばのおもしろさに気づき理解し、広げ深め、追求する中で感じられるものであると考える。

また、「読むこと」の学習は「話すこと・聞くこと」や「書くこと」という表現活動と切り離すことができない。表現を伴う学び合いの場で、他の学習者と「読み」を交流させながら、自分の読みを確立させることが、思考力・判断力・表現力を育てることにもつながると考える。作品を読んだり学習者同士で交流したりする中で、自分のもっている認識との違いに驚きや発見を見出し、そこにことばのおもしろさを感じることができる。

また、自分の認識が変容したり確信をもったりすることで、より深い内容を理解することに学ぶ楽しさを感じることができると考える。

これらのことから、「ことばを通して学ぶ意欲を高める国語科の研究」を「読むこと」の学習領域で研究し、その中でも「対比」に着目した授業構成で意欲が高められるか調査することとした。

2 研究の方法

(1) 対象生徒

本学校園の中学1年生1クラスの子ども40名を対象に調査を行った。小集団の数は10グループであり、各小集団の人数は、4名構成であった。

(2) 調査時期

単元Ⅰを4月に行い、「意欲関心や学ぶ意義についてのアンケート」（5件法）を5月に行い、7月に単元Ⅱを実施し、その後、5月と同様のアンケートを行った。

(3) 授業構成

調査対象とした単元は2つあり、単元Ⅰは「字のない葉書」（向田邦子）を設定し、単元Ⅱは「風景のある言葉」（角野栄子）を設定した。授業計画は次のとおりである。

—単元Ⅰ—

第1次 父の人柄が表われている箇所から、普段と手紙の中での父親の様子のギャップを読み取る（2時間）

第2次 「無口な手紙」と比較し各エピソードを

整理し、視点の違いを考えながら同じエピソードを使った理由を考える(2時間)

— 単元Ⅱ —

第1次 「風景のある言葉」を対比に注目して考える(2時間)

第2次 自分にとっての「風景のある言葉」とは何かを考える(1時間)

(4) 授業の概要

単元Ⅰは、「父があて名を書き、末の妹が文面が書いた葉書」のエピソードを含むエッセイである。物語を豊かに読み味わうには、表層的なストーリーの進行や結末を追うだけでなく、登場人物の言動から心情を細やかに読み取ったり、語り手の視点・展開の仕方・情景描写などから作者の意図を読み取ったりする力が必要である。

「字のない葉書」では、父親の姿を多面的、立体的に描こうとするのに対して、「無口な手紙」では、作者にとってのよい手紙の条件や、手紙自体に対する考えが述べられており、その主題は異なる。さらに、共通するエピソードを比べると「無口な手紙」では、妹が疎開するまでの経緯や、疎開先での妹の様子が切り取られ、逆に葉書を読む父の姿や、あて名に込められた父の思いが書き加えられている。よって、これらの作品を読み比べることで「伝えたいことが変われば、同じ内容でも述べ方が変わる」ことを学習することができる。比較を通して、述べ方を読む指導に適する教材である。

単元Ⅱは、随想の読みを通して「対比に注目することで文章の読みが深まる」ことを発見させるものである。単元Ⅰの随想「字のない葉書」で、同じエピソードを取り上げている「無口な手紙」と比較して読む学習や、自分の考えと他の人や筆者の考えを比べる活動に対して概ね意欲的に取り組むことができていた。これらを踏まえ「風景のある言葉」について、対比に注目して読み取りながら自分の言葉で説明をすることで、対比の効果を実感したり、語彙を増やしたりすることができ

る教材であると考ええる。

指導にあたっては、本教材の内容を理解するためには「風景のある言葉」という言葉の意味を吟味していく必要がある。この必要性を授業の初発で生徒に感じさせ、辞書の意味だけでなく、筆者がその言葉を使った意図を考えさせながら授業構成していった。言語活動を重視した授業には、生徒の語彙力の少なさが課題となるが、ペアやグループ活動を活用することで語彙力の少なさを補い、言語活動を中心とした授業を展開していった。

3 結果と考察

まず、意欲関心や学ぶ意義についてのアンケート結果から、事前と事後には肯定的な回答の割合に変化はなかったが、学習内容が段々と難しくなるにつれて苦手な単元が増えたり定期試験で点数の差が浮き彫りになったりすることで「好き」や「粘り強く取り組んでいる」という気持ちが低くなった生徒がいる。しかしながら、「難しいけれど将来に役立つ」と感じる生徒は増えた。

表1 アンケート結果

		5 う 思 う	4 そ う 思 う	3 ど ち ら で も な い
国語の学習は好きだ	事前	20	13	5
	事後	18	15	5
国語の学習は大切だ	事前	28	9	2
	事後	27	8	2
国語の学習は将来に役に立つ	事前	25	10	3
	事後	31	6	2
国語の学習に粘り強く取り組んでいる	事前	18	13	8
	事後	19	11	8

さらに、学習に粘り強く取り組むことができたと思う具体的な場面や理由の記述が次のとおりである。

- 心境や対比について考えることで、どんな変化があるのかが考えられるので、その時に粘り強く考えられています。
- 表現技法や漢字を覚えるのにも粘り強く取り組んでいると思います。
- しっかりとメモを取って家に帰って復習や予習をしています。
- 粘り強く取り組んでいるか分からない。

— 単元 I —

< 第 1 次 普段と手紙の中での父親の様子のギャップを読み取る >

(1) 第 1 時

- ・ 一読後、登場人物の相関図は自由な形式でまとめさせた (図 1 図 2 図 3)。

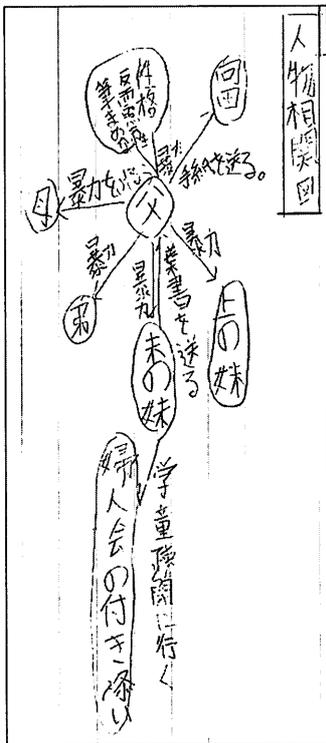


図 1 生徒のノート (人物相関図)

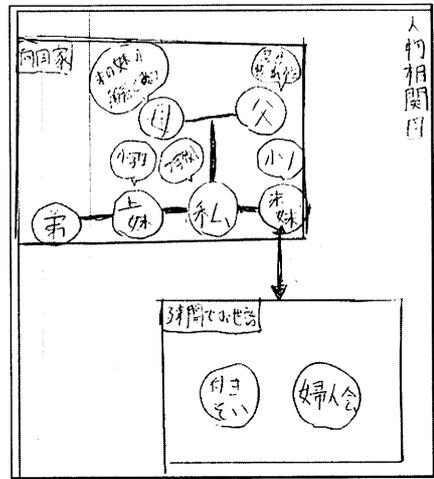


図 2 生徒のノート (人物相関図)

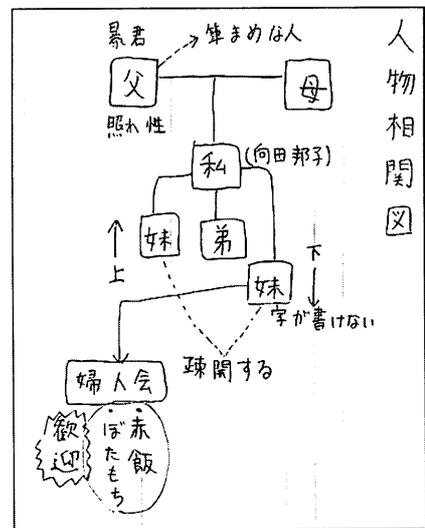


図 3 生徒のノート (人物相関図)

(2) 第 2 時

- ・ 登場人物の中で焦点を当てる人物を決め、その人物を中心に読み取らせていく。本授業では、生徒が焦点を当てる人物を父と設定したので、父親とのかかわりに着目して表にまとめさせた。
- ・ 表にまとめる際の条件を次の 2 つとした。

- ① 項目を 3 つ設定
- ② 項目内容は、父に関することや父とのかかわりから設定

以上のようにし、個人によって表の項目が異なるようにした。表の項目が、次時からの「無口な手紙」との比較や同じエピソードを使った理由について考えるときの根拠となるため、項目を自由にし、根拠となる事柄につながるものを

挙げさせた。

図4の生徒は「父の性格」「妹との関わり」「わたしとの関わり」を項目として挙げている。また、図5の生徒は「父の性格」「手紙・葉書」「妹にしたこと」、図6の生徒は「家の中での父」「父の性格」「手紙に書いたこと」、図7の生徒は「父の性格」「家にいた時の父」「仕事」を項目に挙げ、まとめていた。

性格	暴君 反面昭然性 手紙の中で目頭 責めすかして 演じられたい父親 を写した	妹との関わり	手紙 元気が日足マル をかか だんだん小さく 人に変わった	わたしとの関わり	手紙を他人行 儀のようにかた 二十年のつき合 い 手紙は一旦通 来ることもある 貴女や殿もつけた
父	あばれんぼう 威厳と愛情に あふれた	父	かぼちゃを三 つ 個収穫 るため		

図4 生徒のノート（父とのかかわり）

仕事：保険会社の支店長	父	性格 筆まめ 人 わがや にしが	手紙 手紙を書いたこと 十二歳の宛名だけ書 いて送った 筆まめ 天の目に、小さいかぼ ちゃを三つ収穫した よりにした ↓ 妹の妹にたくさん食べ て	頂上 焦点：人々の注意や関心が集まること 焦点はお父さん
-------------	---	------------------------------	---	------------------------------------

図5 生徒のノート（父とのかかわり）

家の中での父	暴君 反面昭然性 手紙に書いたこと 文面も折り目正しい 時候のあいさつから 始まった 新しい東京の空宅 の間取りが、庭の植 木の種類まで書い てある 貴女の字が、はな い漢字もあるか、勉強 にかまかまかまかまか 引くようにという をええられた	父の性格	暴君 反面昭然性 手紙の中で目頭 責めすかして 演じられたい父親 を写した
--------	---	------	--

図6 生徒のノート（父とのかかわり）

性格	筆まめ 家の中ではまじや で家の中ではまじや 友達から聞いた か人 気がいい	父	家にいた時の父 罵声をあげる けんこつ ふんとして家 中を歩き回る 大酒を飲む 家では自由	仕事 保険会社の支店長 上の妹下の妹を 疎遠
----	---	---	---	---------------------------------

図7 生徒のノート（父とのかかわり）

<第2次 「無口な手紙」と比較し、同じエピソードを使った理由を考える>

(1) 第1時

・書き出しを比較したり、一方にしかないエピソードの意味を考えたりし、同じエピソードの違いを考えさせた。

(2)第2時

- ・同じエピソードを使いながらそれぞれの文章を書いた意図を考えさせた。

○ 字のない葉書は父のために、無口な手紙は、手紙の大切さを伝えるためにこのエピソードを書いた。

○ 字のない葉書は、父の性格等が書いてある。父のない葉書は父や家族の大切さを伝えるためにこのエピソードを使った。無口な手紙は、手紙を書いて相手に気持ちを伝えることについて書いている。無口な手紙は、手紙の大切さを伝えるためにこのエピソードを使った。

○ 書いた目的は、字のない葉書は、父が乱暴なのに、男泣きする様子とか、妹を喜ばせるためにかぼちゃをとることを書いているから父がどんな人か知ってもらうため。無口な手紙は手紙について知ってもらうため。

○ 字のない葉書は、死んだ父の人柄や性格を詳しく書いて父のことを伝えるために、無口な手紙は手紙のほんとうの大切さを伝えるためにエピソードを使った。

○ 字のない葉書は当時の手紙を書いたお父さんを書くために書いた。無口な手紙は父が良い人であり、手紙の良さと悪さについて書くために使った。

○ 字のない葉書は、お父さんを主人公として暴君の面も書いてあり、お父さんを目的として書いた。無口な手紙は、邦子さんの手紙論について書いてあり、手紙を語るために妹の手紙エピソードを書いている。

—単元Ⅱ—

<第1次 「風景のある言葉」を対比に注目して考える>

(1)第1時

- ・「風景のある言葉」と聞いて、どんな言葉かを考えさせた。

- 風景が思い浮かぶ言葉 (山・海・川)
- 形がある言葉

(2)第2時

- ・本文を読んで、「風景のある言葉」と聞き、どんな言葉かを考えさせた。

- 一つじゃない言葉
- 想像ができる言葉



図8 話し合い活動

本文での「風景のある言葉」として「泣くの、やめなさい。あんた、江戸っ子だろ、江戸っ子！」と対比してあげられている「やめなさい、泣き虫！しょうがない子！」との違いを考えていった。どちらの言葉も、言われたら泣きやむだろうが、風景のある言葉だと、「これからのことを考える子」や「ポジティブになれる」という意見があがった。また、「答えを一つにしない」や「決めつけない」を参考に、「風景のある言葉」のキーワードとして以下のことがあがった。

- 無限大に広がっていく
- 一人一人が風景を描ける

＜第2次 自分にとっての「風景のある言葉」とは何かを考える＞

(1)第1時

・毎時間考えてきた「風景のある言葉」を自分の言葉で定義付けをさせた。

- 将来を決めつけない、答えがたくさんある言葉
- 未来を描く包容力のある言葉
- 未来にやる気が出る言葉
- 素直に受け入れられるポジティブな言葉
- 答えを一つにせず、言った人も言われた人も、聞いた人も未来を想像できる言葉
- 言った人も言われた人も、小耳にはさんだ人も決めつけずに、無限大に広がっていくような言葉を聞くと、思わず笑って楽しめる想像がたくさんできる言葉
- 一人ひとりがたくさんの可能性を描ける言葉



図9 話し合い活動

第2時までは、言われた人の立場に立って「風景のある言葉」を考えていたが、本文を再読すると、作者の視点が入っていることに気づいた。つまり、この言葉の定義付けには「言った人」と「言われた人」と「聞いた人」が含まれていなければならない。この気づきから部の「思わず笑って楽しめる想像」という言葉が見られた。

4 結論と今後の課題

「字のない葉書」では、随筆の中に描かれる日常生活と手紙の中での父の姿のギャップを比べながら読んだり、他の随筆と比べながら読んだりしていった。「対比」を通して、表面に表れない父の思いを読み取ることや、同じエピソードを異なる2つの作品に描いた筆者の意図を考えることができ、対比させながら読んでいくことは効果的であった。また、作品内での対比や他の作品との対比など一つの単元で複数の比べる学習を行うことで、生徒の読み深めるための考え方の基礎をつくることができたと考える。

また、話題の中心である「風景のある言葉」に注目し、この言葉の意味を理解するために比べ読みを行っていった。辞書での「風景」「言葉」の意味では、本単元を読み取ることができない。例示を対比することで、ぼんやりとした言葉の意味が具体化し、班での交流を通して多くの解釈を元に自分にとっての「風景のある言葉」の解釈ができた。対比をさせながら言葉にこだわって読み進めることで、毎時間発見や深まりがみられた。

今回のアンケート調査では、意欲や向上心に直接かかわる項目の数値は変動がなかったが、「役に立つ」と国語の学習の有用性を生徒が実感することにはつながった。そこから、意欲が向上していくのかどうかはこれから追跡調査を行っていく必要である。しかし、アンケートの数値には表れないが、話し合い活動の様子やノートのとまとめ方では工夫が見られ意欲を感じることができた。

今後は、同様のアンケートを継続的にとりながら、生徒の学ぶ意欲を高めるための「対比」の工夫の研究を行っていきたい。